

# 爬虫館事件

海野十三

青空文庫



前夜の調べ物の疲れで、もう少し寝ていたいところを起された私立探偵局の帆村莊六（ほむらそうろく）だった。

「お越し下すつたのは、どんな方かね」

「ご婦人です」助手の須永（すなが）が朗（ほが）らかさを強（し）いて隠すような調子で答えた。「しかも年齢（とし）の頃は二十歳（はたち）ぐらいの方です」

（なにが、しかもだ）と帆村はパジャマの釦（ボタン）を一つ一つ外（はず）しながら思った。この手でも確かに目（ま）は醒（さ）める。……

「十分間お待ちねがうように申上げて呉（く）れ」

「はッ。畏（かしこ）まりました」

須永はチョコレート（ドア）の兵隊のように、わぎと四角ばって、帆村の寢室（しんしつ）を出ていった。隣りの浴室の扉（ドア）をあけ、クルクルと身体につけたものを一枚残らず脱ぎすてると、冷水

を張つた浴槽へドボンと飛び込み、しぶきをあげて水中を潜りぬけたり、手足をウンと伸したり、なんのことはない臙肭獣のような真似をすること三分、ブルブルと飛び上つて強い髭をすつかり剃り落すのに四分、一分で口と顔を洗い、あとの二分で身体を拭い失礼ならざる程度の洋服を着て、さて応接室の内扉をノックした。

応接室の函のなかには、なるほど若い婦人が入っていた。

「お待ちせしました。さあどうぞ」と椅子を進めてから、「早速ご用件を承りましょう」

「はア有難とう存じます」婦人は帆村の切り出し方の余りに早いのにちよつと狼狽の色を見せたが、思いきつたという風で、黒眼がちの大きい瞳を帆村の方に向け直した。その瞳の底には言いしれぬ憂いの色が沈んでいるようであった。「ではお話を申しあげますが、実は父が、突然行方不明になつてしまつたんでございます——。昨日の夕刊にも出たのでございますが、あたくしの父というのは、動物園の園長をして居ります河内武太夫でございます」

「ああ、貴女が河内園長のお嬢さんのトシ子さんでいらつしやいますか」帆村は夕刊で、憂いに沈む園長の家族として令嬢トシ子（二〇）の写真を見た記憶があつた。その記事は社会面に三段抜きで「河内園長の奇怪な失踪・動物園内に遺留された帽子と上衣」と

いったような標題ひょうだいがついていたように思う。

「はア、トシ子でございます」と美しい眼をしばたたき、「ご存知でもございましょうが、私共の家は動物園の直ぐ隣りの杜もりの中にございまして、その失踪しました十月三十日の朝八時半に父はいつものように出て行ったのです。午前中は父の姿を見たという園の方も多いのでございますが、午後からは見たという方が殆んどありません。お午餐ひるのお弁当を、あたくしが持つて行きましたが、それはとうとう父の口に入らなかったのです。正午にも事務所へ帰つてこないことを皆様不思議に思つていらつしやいましたが、父は大分變り者の方でございまして、氣が變るとよく一人でブラリと園を出まして、広小路ひろこうじの方まで行つて寿司屋すしやだのおでん屋などに飛び込み、一時半か二時にもなつてヒョックリ帰園きえんいたしますこともございますので、その日も多分いつもの伝でんだろうと、皆さん考えておいでになつたのです。しかし閉園時間の午後五時になつても帰つて参りません。たまにはずつと街へ出掛けて夜分まで帰らないこともあります、その日は事務室に帽子もあり上衣も残つて居ますので、いつもとは少し違ふといふので、西郷さいきょうさん——この方は副園長をしていらつしやる若い理学士です——その西郷さんがお歸りにうちへお寄り下すつて、『園長の例の病氣が始まつた様ようですよ』と注意をしていつて下さいました。ところが其の夜は、

とうとう帰って参りません。夜遅くなることはありません、たとい一時になつても二時になつても帰ってくる父です。それが帰つて来ないので、どうしたことだろうと母も私共も非常に心配しています。園内も調べていただきましたが判りません。警察の方へも捜索方そうさくかたをお願いいたしましたが、『別に死ぬ動機も無いようだから今夜あたり帰つて来られますよ』と云つて下さいました。しかし私共は、なんだか其その儘ままでは、じつと待つていられないほど不安なのでございます。万一父が危き害がいを加えられてでもいるようですと、一刻も早く見付けて助け出したいのでございます。それで母と相談をして、お力を拜はいし借やくに上あがつたわけなのでございます。どう思おぼしめ召めしようか、父の生死せいしのほどは

トシ子嬢は語り終ると、ほんのり紅潮こうちようした顔をあげて、帆村の判定を待った。

「さあ——」と帆村は癖で右手で長くもない顎あごの先をつまんだ。「どうもそれだけでは、河内園長の生死せいしについて判断はいたしかねますが、お望みとあらば、もう少し貴女あなた様からも伺うかがい、その上で他の方面も調べて見たいと思ひます」

「お引受け下すつて、どうも有難とう存じます」トシ子嬢はホツと溜息ためいきをついた。「何なりとお尋ねたずくださいまし」

「動物園では大いに騒いで探したようですか」

「それはもう丁寧ていねいに探して下さったそうでございます。今朝、園にゆきまして、副園長の西郷さんにお目に懸かりましたときのお話でも、念のためと云うので行方不明になった三十日の閉門へいもん後、手分けして園内を一通り調べて下さったそうです。今朝も、また更さらに繰く返して探して下さるそうです」

「なるほど」帆村は頷うなずいた。「西郷さんは驚いていましたか」

「はア、今朝なんかは、非常に心配して居て下さいました」

「西郷さんのお家とご家族は？」

「浅草あさくさの今戸いまどです。まだお独身ひとりで、下宿していらつしやいます。しかし西郷さんは、立派な方でございますよ。仮かりにも疑うようなことを云つて戴いたきますと、あたくしお恨うらみ申上げますわ」

「いえ、そんなことを唯今考えているわけではありません」

帆村は今時いまじ珍めづらしい、日本趣味の女性に敬意と当惑とうわくとを捧さげた。

「それから、園長はときどき夜中の一時や二時にお帰宅かえりのことがあるそうですが、それま  
でどこで過していらつしやるのですか」

「さアそれは私もよく存じませんが、母の話によりますと、古いお友達を訪ねて一緒にお

酒を呑んで廻るのだそうです。それが父の唯一の道楽でもあり楽しみなんです。それと  
いうのもそのお友達は、日露戦役に生き残った戦友で、逢えばその当時のことが思い出  
されて、ちよつとやそつとでは別れられなくなるんだということですよ」

「すると園長は日露戦役に出征されたのですね」

「は、沙河の大会戦で身に数弾をうけ、それから内地へ送還されましたが、それま  
では勇敢に闘いましたそうです」

「では金鷄勲章組ですね」

「ええ、功六級の曹長でございます」応えながらも、こんなことが父の失踪に何の関  
係があるのかと、トシ子は探偵の頭脳に稍失望を感じないわけにゆかなかつた。

しかし最後へ来て、この些細らしくみえるのが、事件解決の一つの鍵となろうとは二人  
もこの時は夢想だもしなかつた。

「園長はそんなとき、帽子も上衣も着ないでお自宅にも云わず、ブラリと出掛けるのです  
か」

「そんなことは先ずございません。自宅に云わなくとも、帽子や上衣は暖いときならば兎  
に角、もう十一月の声を聞き、どつちかと云えば、オーヴァーが欲しい時節です。帽子や

洋服は着てゆくだろうと思いますの」

「その上衣はどこにありますでしょうか。鳥渡ちよつと拝見したいのですが……」

「上衣はうちにございますから、どうかいらしつて下さい」

「ではこれから直ぐに伺いましょう。みちみち古い戦友のことも、もつと話して戴いたこうと思ひます」

「ああ、半崎はんざき甲平こうへいさんのことですか？」トシ子嬢は、父の戦友の名前を初めて口にしたのだった。

## 2

園長邸を訪ねた帆村は心痛しんつうしている夫人を慰なぐさめ、遺留いりゆうの上衣を丹念に調べてから何か手帖に書き止めると、外ほかに園長の写真を一葉借くり、園長の指紋を一通り探し出した上で地続じつづきの動物園の裏門を潜くぐったのだった。

西郷という副園長は、すぐ帆村に会ってくれた。あの西郷隆盛の銅像ほど肥こえている人ではなかったが、随ずいぶん分と身体しんたいの大きい人だった。

「園長さんが失しつそつ踪そうされたそうそうで御心配ごしんぱいでしょう」

と帆村は挨拶あいさつをした。「一体いつ頃おお気きがつかれたのですか」

「全く困ったことになりましたよ」巨漢きよかんの理学士りがくしは顔を曇くもらせて云いった。「いつ気がついたといういことはありませんが、不審ふしんをいいだいたのは、あの日の正午過ひるすぎでしょう。園長がいっこう一向食いっしやう事に帰かえってこられませんでしたのでね」

「園長は午前中ごぜんちゆうなにをしていられたのです」

「八時半はちじはんに出勤しゅつぎんせられると、直ぐに園内いぢゆんを一巡いちじゆんせられますが、先まず一時間いっしやうかん懸かります。

それから十一時前じゅういちじぜんぐらい迄までは事務じむを執とつて、それから再び園内いぢゆんを廻まわられますが、そのときは何処どこということなしに、朝あのうちに気がつかれた檻おりへ行いって、動物どうぶつの面倒めんどうをごらんになります。失しつそつ踪そうされたあの日ひも、このプログラムぷろぐらむに別わかれに大おした変化へんげは無なかったようようです」

「その日は、どの動物どうぶつの面倒めんどうを見みられるか、それについてお話わはありませなせなしたか」

「ありませんでしたね」

「園長えんぢやうを最後さいごに見みたという人ひとは、誰たれでした」

「さあ、それは先刻警察の方が来られて調べてゆかれたので、私も聞いていましたが、一人は爬虫館の研究員の鴨田兔三夫という理学士医学士、もう一人は小禽暖室の畜養主任の椋島二郎という者、この二人です。ところが両人が園長を見掛けたという時刻が、殆んど同じことで、いずれも十一時二十分頃だということです。どっちも、園長は入って来られて二三分、注意を与えて行かれたそうですが、其の儘出てゆかれたそうです」

「その爬虫館と小禽暖室との距離は？」

「あとで御案内いたしますが、二十間ほど距った隣り同士です。もつとも其の間に挟つてずつと奥に引込んだところに、調餌室という建物があります。これは動物に与える食物を調理したり蔵つて置いたりするところなんです。鳥渡図面を描いてみますと、こんな具合です」

そういつて西郷理学士は、鉛筆をとりあげると、爬虫館附近の見取図を描いてみせた。

「この二十間の空地には何もありませんか」

「いえ、桐の木が十二本ほど植っています」

「その調理室へ園長は顔を出されなかつたんでしょうか」

「今朝の調べのときには、園長は入って来られなかつたと云っていました」

「それは誰方が云つたんです」

「畜養員の北外星吉という主任です」

「園長がいよいよ行方不明と判つた前後のことを話していただけませんか」

「よろしゅうございます。閉園近い時刻になつても園長は帰つて来られません。見ると帽子と上衣は其儘で、お自宅から届いたお弁当もそっくり其儘です。黙つて帰るわけにも行きませんので、畜養員と園丁とを総動員して園内の隅から隅まで探させました。私は園丁の比留間というのを連れて、猛獣の檻を精しく調べて廻りましたが異状なしです」

「素人考えですがね、例えば河馬の居る水槽の底深く死体が隠れていないかお調べになりましたか」

「なる程ご尤もです」と西郷副園長は頷いた。「そういう個所は、多少の準備をしなければ検べられませんので直ぐには参りませんでした。今日の午後には一つ一つ演っているのです」

「そりや好都合です」と帆村探偵が叫んだ。「すぐに、私を参加させていただきたいのですが」

西郷理学士は承諾して、卓上電話機を方々へかけていたが、やっこのことで、捜索隊

がこれから爬虫館の方へ移ろうというところだと解ったので、その方へ帆村を案内して呉れることになった。

白い砂利の上に歩を運んでゆくと、どこからともなく風に落葉が送られ、カサコソと音をたてて転がっていった。もう十一月になったのだ。杜蔭に一本鮮かな紅葉が、水のように静かな空気の中に、なにかしら唆かすような熱情を溶かしこんでいるようだった。帆村は、ちよつと辛い質問を決心した。

「園長のお嬢さんは、まだお独身なんですかねエ」

「え？」西郷氏は我が耳を疑うもののように聞きかえした。

「お嬢さんはまだ独身です。探偵さんは、いろんなことが気に懸るらしいですね」

「私も若い人間として気になりますのでね」

「こりや驚いた」西郷理学士は大きな身体をくねらせて可笑しがった。「僕の前でそんなことを云つたつて構いませんが、鴨田君の前で云おうものなら、蟒を噓しかけられますぜ」

「鴨田さんていうと、爬虫館の方ですね」

「そうです」と返事をしたが、西郷氏はすこし冗談を云いすぎたことを後悔した。「ありや学校時代の同級生なので、有名な真面目な男だから、からかつちや駄目ですよ」

帆村は何も応えなかったが、先に園長令嬢のトシ子と語ったときのことと、いま西郷副園長が冗談に紛らせて云ったことを併せて頭脳の中で整理していた。この上は、鴨田という爬虫館の研究員に会うことが楽しみとなった。

「鴨田さんは、主任では無いのですか」

「主任は病気で永いこと休んでいるのです。鴨田君はもともと研究の方ばかりだったのが、気の毒にもそんなことで主任の仕事も見ていますよ」

「研究といますと——」

「爬虫類の大家です。医学士と理学士との肩書をもっていますが、理学の方は近々学位論文を出すことになっているので、間もなく博士でしょう」

「変った人ですね」

「いや豪い人ですよ。スマトラに三年も居て蟒と交際いをしていたんです。資産もあるので、あの爬虫館を建てたとき半分は自分の金を出したんです。今も表に出ているニシキヘビは二頭ですが、あの裏手には大きな奴が六七頭も飼ってあるのです」

「ほほう」と帆村は目を円くした。「その非公開の蛇も調べたんですか」

「そりや勿論ですよ。研究用のものだからお客さんにこそ見せませんが、調べることは一

般と同じに検べますよ。別に園長さんを呑んでいるような贅沢なのは居ませんでした」

帆村は副園長の保証の言葉を、そう簡単に受入れることはできなかつた。園長を最後に見掛けたというところが、此の爬虫館と小禽暖室の辺であつてみれば、入念に検べてみなければならぬと思つた。

「さあ、ここが爬虫館です」

副園長の声に、はつと目をあげると、そこにはいかにも暖室らしい感じのする肉色の丈夫な建物が、魅惑的な秘密を包んで二人の前に突立っていた。

## 3

扉を押して入ると、ムツと噎せかえるような生臭い暖気が、真正面から帆村の鼻を押えた。

小劇場の舞台ほどもある広い檻の中には、頑丈な金網を距てて、とぐろを捲いた

二頭のニシキヘビが離れ離れの隅を陣取つてぬくぬくと睡つていた。その褐色に黒い斑紋のある胴中は、太いところで深い山中の松の木ほどもあり、こまかい鱗は、粘液で気味のわるい光沢を放つていた。頭は存外に小柄で、眼を探すのに骨が折れたが、やつとのことで彫りこんだような黄色い半開きの眼玉を見つけたときには、余りいい気持はしなかった。帆村たちの入つて来たのが判つたものか、フツ、フツと、風に吹きつけられたように身体の一部を波うたせていたのだつた。

こんなのが、裏手にはまだ六七頭もいるんだと思うと、生来蛇嫌いな帆村はもうすっかり憂鬱になつてしまつた。

そのとき奥の潜り戸をあけて、副園長の西郷が、やや小柄の、鱗に一呑みにやられてしまいそうな、青白い若紳士を引張つてきた。

「ご紹介します。こちらがこの爬虫館の鴨田研究員です」

二人は言葉もなく頭を下げた。

「園長の最後に此の室へ来られたときのことをお伺いしたいのですが」

「今朝も大分警視庁の人に苛められましたから、もう平気で喋れますよ」と鴨田研究員は前提して「私は時計を見ない癖なのでしてネ、正午のサイレンからして、あれは多分十

一時二十分頃だったろうと思うのですが、カーキ色の実験衣を着た園長が入って来られまして、そうです、二三分間だと思えますが、ここに出ている一頭のニシキヘビの元気が無いことから、食餌しよくじの注意などを云つて下すつて其儘そのまま出てゆかれたんです」

「それは此の室だけへ入って来られたのですか、それとも」

「今の話は奥でしました。私は別にお送りもしませんでした、園長は確かにこの潜り戸くぐりどをぬけて此の室へ入られたようです」

「表へ出られた物音でも聞かれましたか」

「いえ、別に気に止めていなかっただけです」

「なにか様子に変つたことでもありましたでしょうか」

「ありません」

「園長が表へ出られたと思う時刻から正午ひるまでに、戸外に何か異様な叫び声でもしませんでしたか」

「そうですね。裏の調餌室へトラックが到着して、何だかガタガタと、動物の餌を運びこんでいたようですがね、その位です」

「ほほう」 帆村は眼を見張みはつた。「それは何時頃です」

「さあ、園長が出てゆかれて十五分かそこらですかね」

「すると十一時三十五分前後ですね。動物の食うものというのと、随分嵩張ったものでしょうね」

「それア相当なもんですなア」と副園長が横合から云った。

「馬鈴薯、甘藷、胡蘿蔔、雪花菜、麩、藁、生草、それから食パンだとか、牛乳、兔、鶏、馬肉、魚類など、トラックに満載されてきますよ」

「なるほど」帆村は又鴨田の方へ向き直った。「莫迦げたことをお尋ねいたしますが、この蟒は人間を呑みますか」

「呑まないとは保証できませんが、あまり人間は襲わない習性です。先刻もそんなことを訊かれましたが、園長を呑んでいないことは確かですよ。人間を呑むには時間もかかるば呑んでも腹が膨れているので直ぐ判ります」

帆村は黙って頷いた。

しかし人間の身体を九つ位にバラバラに切断して、この蟒に一塊ずつ喰べさせれば、比較的容易に片づくわけだし、腹も著しく膨むこともなからうと考えたので、質問してみようと思つたが、これは重大な結果になりそうだから、もっと先で訊くことにした。そし

てそれとなく鱗全部の腹の膨れ工合ぐあいを検しらべてやろうと思った。

それで裏手の鴨田理学士の研究室を見せて欲しいと云うと、直ぐ許されて、一同は潜り戸を入つていった。

其処そこはいとも奇妙な広い部屋だつた。豎たて長の三十坪ほどもあるという、ぶちぬきの一室だつたが、縦たてに二等分し、一方には白ペンキを盛んに使つた卓子テーブルや書棚や、書類函や、それから手術台のようなもの、硝子戸ガラスドの入つた薬品棚、標本棚、外科器械棚などが如何にも贅ぜいたく沢たくに並び、其他その他、人間が入れそうなタンクのような訳のわからぬ装置が二つも三つも置かれてあつた。窓は上の方に小さく、天井てんじょうには水銀灯をつかつた照明灯が、気味の悪い青白光せいはいっこうを投げかけていた。床ゆかの一ヶ所を開けて地下に潜ひそんでいる園丁の一団があつたが、それは話のあつた搜索隊に違いなかつた。室の一隅いちぐうには警視庁の制服警せいふく官が二人ほどキラキラする眼を光らせていた。

他の縦半分たてはんぶんには頑丈な檻があつて、その中に見るも恐ろしい大ニシキヘビが七頭、死んだようになつて勝手な場所を占領していた。帆村は檻つかに掴つかまると、端はしの鱗から一頭一頭、腹の大きさを見ていった。しかしどうやらどの蛇も思ひあたるような大きな腹をしたのは居なかつた。しかしバラバラの死体を呑んだとして、犯行が三十日の正午ひる近くと仮定し今

日は二日の午後であるから二日過ぎとすると、この間に蟒の腹は目立たぬ程に小さくなつたのではあるまいか。

「鴨田さん」帆村は背後を振り返つた。「ニシキヘビには山羊を喰べさせるそうですが、何日位で消化しますか」

「そうですね」鴨田は揉み手をしながら実直じつちよく そうな顔を出した。「六貫位はある山羊を呑んだとしまして、先ず三日でしようか」

それなれば十二三貫ある園長を八つか九つの切れにして、九頭の蟒に与えるなら、いままでまる二日は過ぎたから、もう程よく溶けたところに違いない。しかし一体誰が殺したか、誰が死体をバラバラにし、誰が蟒に与えたか。それは一向にハッキリ判っていなかったが、この生なまじろ白しろい鴨田研究員の関係していることは否いなめなかつた。

「ああ、西郷君」そう云つたのは鴨田理学士だつた。「一昨日この爬虫館の前で拾得しゅうとくしたので僕が事務所へ届けて置いた万年筆ね、あれは先刻警官の方が調べられて、園長さんのものだと言つたそうですよ」

「ああ、そう」西郷副園長は簡単に応こたえたが、其の後でチラリと帆村の方に素早すばやい視線を送つた。

帆村は知らぬ風をして、この会話の底に流れる秘密について考えた。館の前で園長の持ち物を拾ったということは、場合によっては決して鴨田氏の利益ではなかった。万年筆はよく落すものではあるが、そんなに具合よく館の入口に落すものではない。また物静かな園長が落すというのも可怪おかしい。鴨田が後に怪あやしまれることを勘かんじよう定じように入れて落して行つたか、さもなくて鴨田が自ら落みずかちていたと偽いつわり届けたものか、どっちかである。始めのようだと鴨田を陥おとしれようとしているのは誰かという問題となり、後のようだと鴨田は自ら嫌疑んぎをうけようとするもので、そこには容易ならぬ犯罪性を発見することになって、帆村は鴨田の性格を知るために、室内を隅から隅まで見廻して、何か怪あやしい物はないかと探し求めた。

「鴨田さんの鞆ですか、これは」と帆村は棚の上に載っている黒皮の書類鞆を指した。

「そうです、私のです」

「随分大きいですね」

「私達は動物のスケッチを入れるので、こんな特製のものじゃないと間に合わないのです」「こつちの方に、同じような形をした大きなタンクみたいなものが三つも横になっていますが、これは何ですか」

「それは私の学位論文に使った装置なんです。いまは使っていませんので、空も同様です」  
「前は何が入っていたのですか」

「いろいろな目的に使いますが、へビが風邪をひいたときには、此の中に入れて蒸気で蒸してやつたりします」

「それにしても、何だか液体でも入っていきそうなタンクですね」

「ときには湯を入れたりすることもありますが」

「だが蟻の呼吸ぬけもないし、それに厳重な錠がかかっていますね」

「これは兎に角、論文通過まで、内部を見せたくない装置なんです」

「論文の標題は？」

「ニシキへビの内分泌腺について——というのです」

そこへドヤドヤと、警官と園丁との一団が嶋田研究員を取巻いた。

「もうこの建物は天井から床下まで調べましたが、異状がありませんでした。唯残っているのは、あの三つのタンクですが、お言葉を信用してそのままにして置きます」

帆村はそれを聞くと飛出してきた。

「待つて下さい。あのタンクは、是非調べて下さい」

「でも開けられないのですよ」帆村の見識り越しの警官が云った。

「そんなことは無い。ね、鴨田さん、開けた方が貴方のためにもいいですよ。あのタンクだけで、清浄潔白になるのじやありませんか」

「いやそう簡単に明けられません」鴨田は強く反対した。「あれを明けると、爬虫館の室温や湿度が急降して、爬虫に大危害を加えることになるので、ちよつとでも駄目です」

「私は大したことはあるまいと思うのですが、演ってみては？」帆村は尚も主張した。

「いやそうは行きません。私は園長から相当の責任を持って爬虫類を預っているのですから、拒絶する権利があります。尤も他を求めて、どうにも解決の鍵が見つからぬときは開けもしましようが、それにはちよつと準備が入ります。この爬虫たちを、元居た暖室の方へ移すのですが、それにはあの室を充分なところまで温め、湿度を整えてやらねばならんのです」

「弱ったな」帆村は苦い顔をした。「一体何時間あつたら、別室の準備ができるのです」  
「まア五時間か六時間でしようね」

「そりや大変だ。じや私も暫く考えてみましょう」と帆村は断乎として云った。「その間

に別の部屋を検べて来ましよう。西郷さん、調餌室というのを案内して下さい」

## 4

帆村は爬虫館の外へ出ると、チエリーに火を点けて、うまそうに吸った。

彼の観察したところでは、若し鴨田かもだに嫌疑けんぎをかけるならば、鴨田は何かの原因で、河内園長を爬虫館に引摺りひきずこみ、これを殺害して裸体らたいに剥ぐと、手術台の上でバラバラに截せつ断んし、彼が飼育している蟒うわばみに一部分喰わしてしまつたのであろう。真逆まさかバラバラにしたとは気が付かなかつたので、捜索隊も蟒の腹を見るには見たが、人間を頭から呑んでいる程の膨ふくれた腹をした蟒が居なかつたので、それで安心していたものと思う。あの特殊装置というものの中には、きつと血染ちぞめになつた園長の服とか靴とかが隠匿かくされているのではなからうか。万年筆は、園長を館の入口で絞めしあげるときに落ちたもので、それを後に何かの事情があつて遺失品いしつひんとして届けたものであろう。

しかし今横に並んで歩いている西郷副園長が、この万年筆について不審な行動を演<sup>や</sup>っているのにも気がつかないわけではない。第一に三十日の遺失品として届けられたものなら、直ぐにも疑つて調べなければならぬのが、今まで黙っていたし、一と目みれば園長のものだ位は判りそうなものを何<sup>なに</sup>故<sup>ゆえ</sup>口を閉めていたのか、嫌な眼付で帆村を覗いたところと云い、ひよつとしたら西郷がすべてを画<sup>かく</sup>策<sup>さく</sup>し、嫌疑が鴨田にかかるように、わざと爬虫館の前に落して置いたのではあるまいか。園長殺害の方法も死体も判らぬが、原因は勤務上の怨<sup>えん</sup>恨<sup>こん</sup>又は、失恋でもあろう。そう思つて西郷の横顔を見ると、どこやら悪人らしいところも無いでは無かつた。

しかし嫌疑<sup>けんぎ</sup>薄<sup>はく</sup>弱<sup>じやく</sup>な西郷まで疑うのは、探偵上の恐しい無限地獄へ落ちこんだようにも思われた。園長令嬢トシ子の言葉としても、副園長を疑うことは申訳なかつた。でも疑えば、トシ子は鴨田のことを爪<sup>つめ</sup>の尖<sup>さき</sup>ほども言わず、却<sup>かえ</sup>つて西郷のことを弁明した。これは西郷の愛<sup>むく</sup>に酬<sup>むく</sup>うことができなかつたので自ら弁解<sup>みずか</sup>をつとめて償<sup>つぐな</sup>いをし、一方鴨田との愛の問題はもう解決を見ているので一言も云わなかつたと考えてはどうか。いよいよ纏<sup>もつ</sup>れ糸のように乱れてくる帆村の足<sup>あし</sup>許<sup>もと</sup>に、事件解決の鍵かと思われる物が転<sup>ま</sup>がっていた。それは一個の釦<sup>ボタン</sup>だつた。

「おお、これは園長の洋服についていた釦に違いない。どうしてこんなところに在るのだらう」

帆村は兼ねて園長の遺<sup>のこ</sup>していった上衣の釦<sup>ボタン</sup>の特徴を手帳に書き留めて置いたことが役立つて大変好運だと思つた。それにしても釦を拾つた場所というのが、調餌室の直ぐ前の、桐<sup>きり</sup>の木材との間に挟<sup>はさま</sup>つた路面だったので、これでは調餌室の人達について一応嫌疑をかけてみないわけにはゆかない。いや、ひよつとすると、爬虫館前に落ちていたという園長の万年筆もこの釦と殆んど同時に落ちたものと認定すると、これは園長の身体を搬<sup>はこ</sup>んで行つた経路<sup>おのずか</sup>を自ら語つていることになりはしないであろうか。恐らく万年筆が最初に落ちて、次にチョッキの釦と思うものが落ちたと考えていいであろう。園長の身体は、爬虫館の前から調餌室へ搬ばれたと考えていいであろう。

だが、どうして人目につかず搬んで行けたかということが次の疑問だつた。それが出来たとすると、特殊の状況が必要だつたことになる。白昼<sup>はくちゆうか</sup>下では、その時、幸<sup>さいわ</sup>いにも観覧人も少く畜養員や園丁も現<sup>げんじよう</sup>場に居合わせなかつたというとき、又夜間なれば、これは極めて容易に行われる。しかし万年筆は園長失踪の日に発見されたのだから、搬<sup>はこ</sup>ばれたのは夜間になる以前だといわなければならぬ。しかも十一時二十分頃までは園長を見掛け

たという人があるのだから、正午ひるになれば園長は食事のため事務所へ帰って行った筈で、それが無かったとすると、どうしても失踪は十一時二十分から正午の間と断定するのが常識のように思う。コースは調餌室から爬虫館ではなくて、反対に爬虫館から調餌室へと考えられる。そこで帆村は、爬虫館の鴨田研究員が十一時三十五分前後に、調餌室の前へトラックが到着して動物の餌を搬びこんでいるらしい騒ぎを聴いたということを出した。すると犯行は、この前か後か。——帆村は調餌室の内部にも多分の疑問符号ふいごうが秘められていることも考えないわけにはゆかなかつた。

西郷理学士と一緒に調餌室に入つてみると、帆村は思わず「呀あッ」と叫びたいくらいだった。塀の外で調餌室を想像しているのと、こうやって大きな俎そじょう上に、血のタラタラにじ滲みでそんな馬肉ばにくの塊かたまりを見るのでは、まるつきり調餌室というものの実感が違った。壁には、象を料理するのじやないかと思うほどの大鉞おおまさかりや大鋸おおのこぎり、さては小さい青竜せいりゆう刀うほどもある肉切庖丁にくきりぼうちようなどが、燦爛さんらんたる光輝ひかりを放つて掛つていた。倉庫には豎半たて分に立ち割つた馬の裸身はだかみや、ダラリと長い耳を下げた兎の籠うさぎかごなどが目についた。

この物凄い光景を見た瞬間、帆村の頭脳あたまの中に電光のように閃ひらめいた幻影げんえいがあった。それは、園長の死体が調餌室に搬おろばれたと見る間に、料理人が壁から大きな肉切庖丁を下し

て、サツと死体を截断する。そして駭くべき熟練をもつて、胸の肉、臀部の肉、脚の肉、腕の肉と切り分け、運搬車に載せると、ライオンだの虎だの檻の前へ直行して、園長の肉を投げ込んでやる。……いや、恐しいことである。

「これが、調餌室の主任、北外星吉氏です」西郷副園長が、ゴム毬のように肥えた男を紹介した。

「やあ、帆村さんですか」北外畜養員はニコヤカに笑った。

「貴方のお名前は兼ねてよく知っていましたよ。今度の事件はまるで、貴方に挑戦しているようなもので、実にうってつけの大事件ですなア」

帆村はこの機嫌のいい、しかし何だかひやかされているような気がしなくてもない北外の挨拶に対して、頓に言うべき言葉もなかった。しかし此のまんまるく太った子供の相撲取のような男の顔を見ていると、彼が悪事を企図むような種類の人間だとは思えなくなつた。帆村は勢い率直な質問をこの男に向つてする勇気を得たのだった。

「北外さん、私は園長の身体が、この調餌室か、それとも隣りの爬虫館かで、料理されちまつたように思うのですがね」

「はアはア」北外は小さい口を勢一杯に開けて、わざとらしく駭いた。「いやそれは大

発見ですな」

「貴方は園長が失踪された朝の、十一時二十分頃から正午まで何処に居られましたか」

「僕が有力なる容疑者というお見立ですな」北外はニヤリと笑った。「さてお尋ねの時間に於ては、この室内に僕一人が残っていた——とこう申上げると、貴方は喜ばれるのでしょうか、実はその時間フルに、一族郎党ここに控えていたんです。それというのが、十一時四十分頃に、けだものの弁当の材料が届くことになっていまして、室からズラかることが出来ないのです」

「それでは其の時間前後は、何をしておいででした？」

「先ず時間前は、当日も六人の畜養員が、庖丁を研いだり、籠を明けたり、これではなかなか忙しく立ち働きました。そのうちにいつもの時間になると、トラックに満載された材料がドツと搬ばれて来ます。するともう戦場のような騒ぎで、この寒さに襯衣一枚でもつて全身水を浴たように、汗をかきます。それが済むと早速調理です。煮るものは大してありませんが、それぞれのけだものに頃合いの大きさに切ったり、分けて容器に入れたりするのが大変です。肉類の方は、生きている兎だの鶏だのには、冥途ゆきの赤札をぶら下げるだけですが、その外のは必ず頭のある魚を揃えたり馬肉の目方をはかつて適当

の大きさに截断し、中には必ず骨つきでないといけないものもあって、それを拵こしらえるやら、なかなか忙しくて、おひるの弁当が、キッチンと正午ひるにいただけるとは殆んど稀まれで、いつも一時近くですね。その忙しさの間に、園長を掴つかまえてきて、これも料理しスペシャルの御馳走ごちそうとして象ぞうや河馬かばなどにやらなきやならんそうで、いやはや大変な騒さわぎですよ」

帆村は、うっかり園丁に象や河馬に人間を食わせる話をしたのが、こんなところへヒョックリ出て来ようとは思いがけなかつたので、横を向いて苦にが笑がわいをした。兎とも角かく、調餌室の連中はあの時間、犯行を遂とげるなどとは非常に困難であることが判つた。

してみると、園長の万年筆ポタンや釦ボタンは、一体何を語っているのだろうか。理窟からゆけば、どうしても調餌室の連中が疑われてくるのであるが、北外きたとの話では疑うのが無理である。すると、残るのは何者かが調餌室の人たちに嫌疑を向けるために、万年筆を落し、釦を調餌室の前に捨てたとしかかんがえられない。何者がやったことかは知らぬが、そうだとすると、犯人は実に容易ならぬ周到な計画を持っていたものと思われる。

そこで帆村は大事にしていた切札を、ポイと投げ出す気になつた。

「北外きたとさん。隣りの爬虫館はちゆうかんの蟒うわばみどものことですがね。皆で九頭ほどもありますが、あれに人間の身体を九個のバラバラの肉塊にくかいにし、蟒うわばみどもに振舞まわつてやったら、嘸さぞよろこんで呑む

ことでした。帆村は北外の答えを汗ばむような緊張の裡に待った。

「うわツはツはツ」北外は無遠慮に笑い出した。「いや、ごめんなさい、帆村さん、あの鱗という動物はですな、生きているものなら躍りかかって、たとい自分の口が裂けようと呑みこみますが、死んでいるものはどんなうまそうなものでも見向きもしないという美食家です。ここでは主に生きた鶏や山羊を食わせています。貴方は多分園長の死体をとを云つていられるのですが、バラバラでは鱗の先生、相手にしませんでしょうよ」

帆村は折角登りつめた断崖から、突っ離されたように思った。穴があれば入りたいたいは、この場のことだろう。彼は北外畜養員に挨拶をして、遁げるように室を出た。

彼は人に姿を見られるのも厭うように、スタスタと足早に立ち去った。園内の反対の側に遺された藤堂家の墓所があった。そこは鬱蒼たる森林に囲まれ、厚い苔のむした真に静かな場所だった。彼はそこまで行くと、園内の賑かさを背後にして、塗りつぶしたような常緑樹の繁みに対して腰を下した。

「ああ、何もかも無くなった！」

帆村は一本の煙草をつまむと、火を点けて歎息した。

「一体、何が残っているだろう」

最初から一つ一つ思いかえしてゆく裡うちに、特に気のついたことが二つあった。一つは園長がいつも呑み仲間としてブラリと訪ねて行った古き戦友半崎はんききこうへい甲平こうへいに会うことだった。そうすれば、まだ知られていない園長の半面生活はんめんせいかつが曝露ばくろするかも知れない。もう一つはどうしても事件に関係があるらしい爬虫館を、徹底的に搜索さくさくしなおすことだった。ことに開けると爬虫たちの生命おびやかを脅おびやかすことになるという話のあった鴨田鴨田研究員苦心くしんの三本のタンクみたいなものも、此際このさいどうしても開けてみなければ済すまされなかつた。あのタンクは、故意か偶然か、人間一匹を隠すには充分な大きさをしているのだった。

そんな結論を生んでゆく裡に、帆村の全身にはだんだんに反抗的な元気が湧き上つてきたのだった。

「須永すながを呼ぼう」

彼は公衆電話に入って帆村探偵局の須永助手を呼び出すと直すぐに動物園へ来るように命じた。

爬虫館の鴨田研究室の裡うちへツカツカと入って行つた帆村探偵は、そこに鴨田氏が背後向うしろきになり、ビーカーに入つた茶褐色ちやかつしよくの液体をパチャパチャ掻かき廻しているのを発見した。外には誰も居なかつた。

帆村の登あしおと音に気がついたらしく、鴨田は静かにビーカーを振る手をちよつと停とどめたが、別に背後を振り返りもせず、横に身体を動かすと、硬質陶器こうしつとうきでこしらえた立派な流し場へ、サツと液体を滾こぼした。すると真白な烟けむりが濛もう々と立昇たちのぼつた。どうやら強酸性きようさんせいの劇薬らしい。なにをやっているのだろう。

「鴨田さん、またお邪魔じやまに伺うかがいました」帆村はぶつきら棒に云つた。

「やあ！」と鴨田は愛想よく首だけ帆村の方へ向いて「まだお話があるのですか」とニヤニヤ笑い乍ながら、水道の水でビーカーの底を洗つた。

「先刻さつきの御返事をしに参りました」

「先刻の返事とは？」

「そうです」と帆村は三つの大きな細長いタンクを指さして云つた。「このタンクを直ぐに

開いていただきたいのです」

「そりや君」と鴨田はキツとした顔になって応えた。「さつきも言ったとおり、これを直ぐ開けたんでは、動物が皆斃死へいししてしまいます」

「しかし人間の生命には代えることは出来ません」

「なに人間の生命？ はッはッ、君は此のタンクの中に、三日前に行方不明になった園長が隠されているのだと思っているのですね」

「そうです。園長はそのタンクの中に入っているのです！」

帆村はグンと癩あけくにさわった揚句あげく（それは彼の悪い癖だった）大変なことを口走ってしまった。それは前から多少疑いを掛けていたものの、まだ断定すべきほどの充分な条件が集つていなかったのだ。怒鳴どなつたあとで大いに後悔こうかいはしたものの、不思議に怒鳴つたあとの清すがすが々しさはなかった。

「君は僕を侮辱ぶじよくするのですね」

「そんなことは今考えていません。それよりも一分間でも早く、このタンクを開いていたきたいのです」

「よろしい、開けましょう」断乎だんぷとして鴨田が思切おもいきつたことを云った。「しかし若もしも

このタンクの中に園長が入っていないなかつたら君は僕に何を償つぐないます」

「御意ごいのままに何なりと、トシ子さんとあなたの結婚式いっせに一世一代よきようの余興よきようでもやりませよ」

この帆村の言葉はどうやら鴨田理学士の金きん的てきを射うちぬいたようであつた。

「よろしい」彼は満まん更ざらでない面持おももちで頷うなずいた。「ではこの装置うなずを開けましょうが、爬虫どもを別の建物へ移さねばならぬので、その準備に今から五六時間はかかります。それは承知して下さい」

「ではなるべく急いで下さい。今は、ほう、もう四時です。すると十時じゅうごろまでかかりますね。警官と私の助手を呼びますから、悪あしからず」

「どうぞご随意ずいに」鴨田は云つた。「僕も今夜は帰りません」

帆村はその部屋から警官を呼んだ。副園長の西郷にも了りよう解かいを求めたが、彼も今夜はタンクが開くまで、爬虫館に停つていようと云つた。

しかし帆村は、彼等と別なコースをとる決心をしていた。丁度そこへ助手の須永がやつてきたので、万事について、細こま々と注意ちゅういを与え、爬虫館の見張りを命じてから、彼一人、動物園の石門を出ていった。既に秋の陽ひは丘の彼方に落ち、真黒な大杉林の間からは暮れ

のこつた湖面が、切れ切れに灰白く光っていた。そして帆村探偵の姿も、やがて忍び闇の中に紛れこんでしまった。それから時計の秒針の響きばかりがあった。午後五時、六時、七時、それから八時がうつても九時がうつても、帆村の姿は爬虫館へ帰ってこなかった。九時半を過ぎると多勢の畜養員や園丁が檻を担いで入って来て無造作にニシキヘビを一頭入れては別の暖室の方へ搬んで行った。仕事は間もなく終わった。助手の須永は、先ほどから勝誇ったように元気になってくる鴨田理学士の身体を、片隅から睨みつけていた。やがて爬虫館の柱時計がボーン、ボーンと、あたりの壁を揺すぶるように午後十時を打ちはじめた。人々は、首をあげてじつと時計の文字盤を眺め、さて入口をふりかえつたが、どうやら求める登音は蟻の走る音ほど聞えなかった。

「帆村さんはもう帰って来ないかも知れませんよ」

鴨田理学士が両手を揉み揉み云った。

「いつまで待つて居たつて仕様がありませんから、この儘閉めて帰ろうではありませんか」警官と西郷副園長とが、腰を伸して立ち上った。須永も立ち上った。しかし彼は鴨田の解散説に賛成して立ったわけではなかった。

「もう少し待つて下さい。先生は必ず帰つて来られます」

須永は叫んだ。

「いや、帰りません」

鴨田は尚も云った。

「それでは——」と須永は決心をして云った。「先生の代りに僕が拝見しますから、このタンクを開けて下さい」

「それはこつちでお断りします」

憎々しい鴨田の声に、須永が尚も懸命に争っている裡に、いつの間に開いたか、入口の扉が開かれ、そこには此の場の光景を微笑ましげに眺めている帆村の姿があつた。

「皆さん大変お待たせをしました」と挨拶をした後で、「おや蟒どもは皆、退場いたしましたね、では今度は私が退場するか、それとも鴨田さんが退場なさるか、どつちか番になりました。ではどうか、あれを開いていただきましょう、鴨田さん」

「……」鴨田は黙々として第一のタンクの傍へ寄り、スパナーで六角の締め金を一つ一つガタンガタンと外していった。一同は鴨田の背後から首をさし伸べて、さて何が現れることかと、唾を呑みこんだ。

「ガチャリ！」

と音がして、タンクの上半部がパクンと口を開いた。が、内部は同心管どうしんかんのようになっていて、鱚ふかの鱗ひれのような大きな襞ひだのついた其の同心管の内側が、白っぽく見えるだけで、中には何も入っていないかった。

「空虚からつぽだツ」

誰かが叫んだ。

鴨田研究員は第二のタンクの前へ、黙々として歩を移した。同じような操作がくりかえされたが、これも開かれた内部は、第一のタンクと同じく、空虚からだった。

失望したような、そして又安心したような溜息なげ息が、どこからともなく起った。

遂に第三のタンクの番だった。流石さすがの鴨田も、心なしに緊張に震える手をもって、スパナーを引いていった。

「ガチャリ！」

とうとう最後の唐櫃からびつが開かれたのだった。

「呀あッ！」

「これも空虚からつぽだツ！」

帆村は須永に目くばせをして彼一人、前に出た。彼の手には自動車の喇叭らっぱの握りほどあ

るスポイトとビーカーとが握られていた。

彼は念入りに、白い襷ひだのまわりを獵あさつて、何やら黄色い液体をスポイトで吸いとり、ビーカーへ移していた。

だがそれは大した量でなく、ほんの底を潤うるおす程度にとどまった。

帆村は尚なおもスポイトの先で、弾力のある襷ひだを一枚一枚かきわけ、検しらべていたが、

「呀ッ」

と叫んで顔を寄せた。

「これだッ。とうとう見付かった」

そう云つて素すば早く指先でつまみあげたのは長さ一寸あまりの、柳やなぎ箸ばしほどの太さの、鈍く光る金属——どうやら小銃しょうじゆうの弾丸たまのような形のものだった。

一同は怪訝けげんな面持で、帆村が指先にあるものを眺ながめた。帆村はその弾丸のようなものを鴨田の鼻先へ持つていった。

「貴方あなたはこれをご存知ですか」

鴨田は腑ふに落ちかねる顔付で、無言に首を振った。

「貴方はご存知なかったのですね」

帆村はどうしたのか、ひどく歎息して云った。

「これはですね——」

一同は帆村の唇を見つめた。

「——これは露兵の射った小銃弾です。そして、これは三十日から行方不明になられた河内園長の体内に二十八年この方、潜っていたものです。云わば河内園長の認識標なんです。しかも園長の身体を焼くとか、溶かすかしなければ出て来ない終身の認識標なんです」

「そんな出鱈目は、よせ！」

鴨田が蒼白にブルブルと慄えながら呶鳴った。

「いや、お気の毒に鴨田さんの計画は、とんだところで失敗しましたよ。貴方は園長を殺すために、医学を修め、理学を学び、スマトラまで行って蟒の研究に従事せられた。そして日本へ帰られると、多額の寄附をしてこの爬虫館を建て、貴方は研究を続けられた。七頭のニシキヘビは貴方の研究材料であると共に、貴重な兇器を生むものだった。私どもはよく医学教室で、犬を手術し、唾液腺を体外へ引張り出して置いて、これにうまそうな餌を見せることにより、体外の容器へ湧きだした犬の唾液を採集する実験を見かけま

すが、貴方は生物学と外科とにすぐれた頭脳と腕とで、蟒の腹腔に穴をあけ、その消化器官の液汁を、丹念に採集したのです。それは周到なる注意で今日まで貯蔵されていきました。そして又ここに並んでいるタンクは、巧妙な構造をもった人造胃腸だったんです」

あまりに意外な帆村の言葉に、一同は哑然として彼の唇を見守るばかりだった。

「鴨田さんは三十日の午前十一時二十分頃、園長をひそかに人気のない此の室に誘い、毒物で殺したんです。そこで直ちに園長の軽装を剥いで裸体とし、着衣などは、あの大鞆に入れ其の夕方、何喰わぬ顔で園外に搬び去りましたが、それは後の話として、鴨田さんは園長の口をこじ開けるや、蟒の消化液では溶けない金歯をすっかり外して別にすると、もうこれで全部が溶けるものと安心して此の第三タンクに入れました。そこで永年貯蔵して置いたニシキヘビ消化液をタンクへ入れて密封をすると、電動仕掛けで同心管——それは襞をもった人造胃腸なんです、その胃腸を動かし始めたんです。適当な温度に保つてこれが続けたものですから、鴨田さんの研究によると、今夜の八時頃までに完全に園長の身体はタンクの中で、影も形もなく融解してしまうことが判っていました。

鴨田さんにその自信があつたればこそ、この時間になつてタンクを開くことを承知されたのです。そして尚も計画をすすめて、タンクの中の溶液を、そのまま下水へ流してしま

うことにしました。急いで流せば、こんな静かなところだからそれと音を悟さとられるので、排水弁はいすいべんを半開はんびらきとし、ソロソロと園長の溶けこんだタンクの内容液を流し出したんです。しかしそれは一つの大失敗を残しました。流出速度が極めて緩慢かんまんだったために、園長の体内に潜入していた弾丸たまは流れ去るに至らず、そのまま襲ひたの間に残留ざんりゅうしてしまつたんです。この弾丸というのは、園長が沙河さかの大会戦だいかいせんで奮戦ふんせんの果はてに身に数発の敵弾をうけ、後に野戦病院で大手術をうけましたが、遂に抜き出すことの出来なかつた一弾いちだんが身体の中に残りました。その一弾が皮肉ひにくにも棺桶かんとけならぬ此のタンクの中へ残つたわけなんです。本当に恐ろしいことですね。なお附け加えると、園長の金歯きんばは、大胆だいたんにも私の見ている前でビーカー中の王水おうすいに溶かし下水道へ流しました。万年筆や鉚ボタンは鴨田さん自身まが撒まいたもので、これは犯罪者特有のちよつとした搔乱手そうらんしゅだん段だんです」

「出鱈目でたらめだ、捏造ねつぞうだ！」

鴨田は尚も咆哮ほうこうした。

「では已やむを得ませんから、最後のお話をいたしましょう」帆村は物静かな調子で云つた。「この犯行の動機は、まことに悲惨ひさんな事実から出て居ます。話は遠く日露戦争の昔にさかのぼりますが、河内園長が満州の野に出征しゅつせいして軍曹ぐんそうとなり、一分隊の兵を率いて例

の沙河の前線、遼陽の戦いに奮戦したときのことです。其のとき柵山南条と  
いう二等兵がどうした事か敵前というのに、目に余るほど遺憾な振舞をしたために、皇  
軍の一角が崩れようとするので已むを得ず、涙をふるって其の柵山二等兵を斬殺した  
のです。これは、軍規に定めがある致方のない殺人ですが、それを見ていた分隊中の  
或る者が、本国へ凱旋後柵山二等兵の未亡人にうっかり喋ったのです。未亡人は殺され  
た夫に勝るしつかり者で、そのときまだ幼かった一人の男の子を抱きあげて、河内軍曹へ  
の復讐を誓ったのです。その男の子——兔三夫君は爾来、母方の姓嶋田を名乗って、  
途中で亡くなった母の意志を継ぎ、さてこんなことになったのです」

帆村は語を切った。しかし嶋田学士は、今度は何も云わずに項低れていた。

「もう後は云う必要がありませんまい。最後に御紹介したい一人の人物があります。それは  
この話のヒントを与えて以後私の調べに貢献して下さった故園長の古い戦友、半崎甲平  
老人であります。この老人は同郷の出身ですが、衛生隊員として出征せられていたの  
で、後に園長がX線で体内の弾丸を見たときにも立合い、また戦場の秘話を園長から聴き  
もした方です。嶋田さんの亡き父君のことも知ってられるんですから、此処へお連れしま  
した。いま御案内して参りましょう」

そういつて帆村は立上ると、入口の扉ドアをあけた、が、其処には老人の姿は見えなかった。向うを見ると、爬虫館の出入口が人の身体が通れるほどの広さにあき、その外に真黒な暗や闇みがあつた。

「呀あッ、鴨田さんが自殺しているッ」

そういう声を背後に聞いた帆村は、もう別にその方へ振返ろうともしなかつた。

そして彼の胸中には、事件を解決するたびに経験するあの苦にが酸ずっぱい悒ゆう鬱うつが、また例の調子で推し騰おつてくるのであつた。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1932（昭和7）年10月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 爬虫館事件

## 海野十三

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>